



公認会計士の バックグラウンドを力に。 日本とニューヨークを繋ぐ 私にしかできないこと。



日本・米国公認会計士 フリーランスとして活躍

須能 玲奈 Rena Suno

2004年公認会計士試験に合格し、あずさ監査法人の国際部に入所。製造業やサービス業を中心に、上場企業や欧米子会社の会計監査に従事。大学時代から憧れていたニューヨークで働くという夢を追い求め、2009年夏に退職し、渡米。語学学校にて学んだ後、現地の日系子会社、BDO USA, LLPを経て、Ernst & Young, LLPの日系企業部門に5年半在籍。米国公認会計士の資格(ニューヨーク州)を取得し、日本の上場企業の在米子会社や欧米企業の監査を行う。グリーンカード取得後、会計コンサルティング事業を行うConnor Group、日系企業の海外進出をサポートする日系ベンチャー企業の社長を経て独立。現在は金沢発のカレーチェーンであるGo Go Curryの経理・財務を統括する他、ニューヨーク最先端のビジネス等について日本のメディアへの記事の寄稿、会計に関する記事を中心に翻訳を行っている。著書に「ニューヨークで学んだ人生の拓き方：帰国子女でない私が11年のNY生活と米国企業で学んだ国際人になるためのヒント」(アマゾン・キンドル版)。

日本で会計士としての実務経験を積んだ後、憧れの地、ニューヨークへ。シビアなビジネス環境の中、確かなキャリアを築いてきた須能玲奈さんに、公認会計士の枠を超え挑戦し続ける意味や面白さなどについて伺いました。

公認会計士を目指すきっかけと キャリアのスタート

—公認会計士を目指したきっかけとどのようにキャリアをスタートされたかお話しいただけますか？

慶應義塾大学に入学して間もない頃にたまたま参加したオリエンテーションで、監査法人で働く会計士のお話を聞く機会があり、その時に初めて公認会計士の資格のことを知りました。女性でも多様な働き方ができるということや、自分の意思でキャリアの選択が可能であるということを知り、とても興味を持ちました。そこで大学2年生の夏から勉強を始め、大学卒業後の2004年に試験に合格。その年の12月にあずさ監査法人の国際部に入所しました。

海外に興味があったので国際部を志望

し、希望の部署に配属されてすごく嬉しかったことは今でもはっきりと覚えています。当時のあずさ監査法人は設立2年目。国際部は、新日本監査法人から分かれてできたKPMGを母体とする小さなグループで、アットホームな部署でした。そこで上場日系企業の監査や会社法監査、外資系企業のリファーマル業務(アメリカやヨーロッパで上場している会社で日本に子会社がある会社の会計監査やレビュー)に4年半ほど携わりました。リファーマル業務は、規模がさほど大きくない1、2週間で終わる仕事でしたが、通常の日本企業の監査に加えてそうした監査ができたのも、国際部ならではの経験でした。当時は12月入社だったため、入社後すぐに外資系企業の決算の時期を迎えました。最初は、英語の試算表がまったく分からず、日英対応の会計辞書を使い、解読していました。また、現場では試験で勉強したことがそのまま応用できるわけではなく、実務とのギャップを感じる日々でした。

印象に残っているのはスタッフ1年目の終わりの頃、上場会社の監査をしていた時のことです。決算短信の発表前日に徹夜し、次の日はお昼を食べるのも忘れて無我夢中で仕事をしました。決算短信は

投資家向けに公表されるためたった一つのミスも許されないので、締切ギリギリまでハラハラしましたが、今となっては良い思い出です。

渡米に至る経緯と ニューヨークへの想い

—海外への興味、渡米のきっかけやニューヨークへの想いについて教えてください。

私は英語の語感や響きが好きで、小学生の頃から英語のレッスンを受けたり、基礎英語のラジオを聞いたりしていました。中学生の頃には、英語が話せるようになれば世界中の人と交流することができ、自分の世界観が広がるのではないかとおぼろげに感じていて、その頃から海外、特にアメリカへの憧れは強かったです。大学時代には、全世界に支部を持つアイセック(AIESEC)という国際交流サークルに入りました。そのサークルを通じて東京へ企業研修に来ていたベネズエラ、カナダ、インドネシアなど多くの国の方々と週末に出かけたり、イベントを開催したりして楽しんでいました。

ニューヨークとの出会いは大学1年生の時のことです。友人と弾丸旅行でニューヨークに遊びに行った時に、多様な民族が生き生きと暮らすニューヨークの街に大きな衝撃を受けると同時に、直感で「この街は私に合っているのではないかと感じました。ニューヨークには世界中から夢を追い求めてやって来る人たちが後を絶たず、方言も入ると数えきれない種類の言葉が飛び交い、皆自国の文化や伝統を守りながら暮らしています。そこにいるだけで世界中を旅行しているような気分になれるのは、世界中を見渡してもニューヨークだけだと私は思います。旅行が好きなので、ニューヨークに移る前に世界中の様々な都市を訪ねましたが、日本以外で住みたいと思ったのはニューヨークだけでした。そして、最後の修了試験が終わった30歳になる目前、将来のことを真剣に考えた時に「渡米するなら今しかない」と思い、2009年の夏に会社を辞め、ニューヨークに渡りました。今でも多くの人に驚かれますが、無職での語学学校生からのスタートでした。私は長期間ニューヨークで生活したかったので、会社のシニア派遣制度などは考えませんでした。4年制の大学や2年制の大学院を卒業すると、OPTというビザがもらえるため、一般的にはOPTを使って就職してから就労ビザを取る、という流れなのですが、私の場合は会計士と

して日本で4年半の社会人経験があったので、学生ビザで渡米し、語学学校に行きながら仕事を探す、という方法になりました。ちょうどリーマンショックの直後で、リストラもあるような状況でしたので、タイミング的にはあまり良くなかったかもしれませんが、良い仲間たちに恵まれたあずき監査法人は素晴らしい職場環境でしたが、「先は分からないけれど自分が本当にやりたいことをしてみよう」という気持ちが強くなったことが、渡米の大きなきっかけになりました。

—渡米してからはどのようなキャリアを積まれたのでしょうか？

最初の1年間は現地の語学学校に通っていました。自分が好きなニューヨークの街に住んでいるだけで幸せでしたが、無職だという不安は常にどこかにありました。そのため、早く仕事に就けるように今できることに取り組もうと、毎日必死に英語を勉強しました。貯金が底をつく前にビザが取れなかったら日本へ帰国しなければいけない状況で、リスクと隣り合わせ。日本での4年半の会計監査の経験があればニューヨークで就職できるのではないかとこの想いを強く持って就職活動を続けました。そして、渡米から1年後、日本の上場会社のニューヨークの子会社で経理と総務を担当させていただくことになりました。前述し

たように、アメリカではOPTを持っていない人を会社が雇うことはめったにありません。会社側からすると私がどのような人か分からないまま就労ビザのサポートをしなければいけないため、リスクもあったと思います。それでも雇ってくださった最初の会社には本当に感謝しています。

しかし、その会社で経理の仕事をするうちに、監査人としてアメリカの監査現場を見てみたいという気持ちや、米系企業でアメリカ人と肩を並べて仕事をしてみたい、という渡米時に抱いていた気持ちが蘇ってきました。日本で働いていた時から、アメリカのBig4で監査の現場を経験したいと思っていて、それはグリーンカードを取得することと合わせて渡米時の大きな目標でした。ちょうどその時、BDO USA, LLPのニューヨーク事務所が、日本のクライアントを増やすために日本人会計士を探してご縁をいただきました。部署には日本人が誰もおらず、まだ英語もおぼつかず、毎日が仕事よりも英語の勉強、というような状況でしたが、アメリカ人の仕事のスタイルやビジネスの現場での振る舞い方などを間近で見ることができたのは、今でも私がアメリカ人と仕事をする際の基盤になっています。その後、監査人としてBig4での経験を積みたいと思い、Ernst & Youngの日系企業部門に転職し、5年半、日系子会社や欧米の会社の監査に従事しました。また、会社のサポートで渡米時の最大の目標であったグリーンカードを取得することができました。

大好きなニューヨークで一般企業と監査法人での仕事を体験し、渡米時の目標でもあったBig4での監査経験を積むという目標も達成できた時、日本人の私にしかできない日米をつなぐ仕事をライフワークにすることを決めました。アメリカのコンサルティング会社を経て、日本の地方創生をテーマに日本独自の様々な商品や、職人さんの伝統工芸品をニューヨークでテストマーケティングとして扱うセレクトショップの経営を友人に頼まれたことをきっかけに、雇われ社長の形で店舗経営や日本の伝統文化を紹介する数々のイベントを



企画から実行まで指揮監督しました。コロナ禍での諸事情もあり、2020年の夏からフリーランスになり、Go Go Curryという金沢発のカレーチェーンの米国展開を行っている会社の経理と財務全般を統括する仕事を中心に、ライターとしてニューヨークのビジネスや文化などについての記事を日本のメディアに寄稿しています。

公認会計士としての矜持と キャリアに与えた影響

—実際に公認会計士になって良かったと思う瞬間などエピソードを添えて教えてください。

公認会計士になって良かったと常々思うのは、帰国子女でない私が大好きなニューヨークに渡り、グリーンカードを取得して働く、という夢を叶えることができたことです。異国の地で働くことは決して簡単なことではありませんが、会計監査のバックグラウンドがあったからこそ、就労ビザを取得して、米系企業で仕事をすることができました。アメリカの就労ビザの申請では、「アメリカ人ではできない」仕事であることを移民局にアピールすることが必要です。私の場合は、会計監査と日本語で仕事ができるという強みの組み合わせが、様々な場面で役立ちました。ニューヨークで仕事をする場合でも、日系子会社のクライアントの場合、担当者が日本人ということもありましたし、日本の本社の役員や監査人とやりとりを行う機会もあります。アメリカで育ったりアメリカの大学に進学したりして日本で就労経験がない場合、敬語を使うことや日本語で会計監査の話することに抵抗があるように感じました。そのため、日本語と英語で会計監査の仕事ができることは大きな強みとなり、会社でも高く評価してもらえました。やはり、日本で会計監査の経験を積んでいたからだと、今でもあずさ監査法人時代にお世話になった部署の皆様に感謝しています。

—監査法人でのお仕事その後のキャリアに与えた影響等についてお伺いできますか？

監査法人の仕事は特殊で、監査の過程で様々な部署の人と話をしたり、普通の人になかなか見ることができない資料を見たりする機会が数多くあります。また、年間を通じて多岐にわたる業種や大小様々な規模の会社に行く機会もあります。そうした経験を通して、俯瞰的な視点から会社がどのように動いているのかを間近で見ることができるのは、監査法人ならではの魅力だと思います。それは監査の現場を離れた今でも生きていて、例えば記帳作業もただ事務的に行うのではなく「この数値はなぜこうなったのだろう」、「この点はオペレーションで改善できるのではないか」ということを数字面から浮き彫りにして、すぐに社長や周りの人に相談することができます。数値だけで会社の業績を追うのではなく、会社全体の経営という観点からも会社の動きを見ていけるのは、会計監査の経験があったからだと思います。また、監査の仕事では、特にマネージャー以上になると様々な責任が発生し、進捗管理はもちろん、社内外のミーティングをリードし、税務やIT部門を含めたチーム全体のマネジメントも要求されます。特にニューヨークで仕事を始めてからは、バックグラウンドの異なる様々な国の人たちがチームにいましたので、彼らのモチベーションをどのようにあげるか、チームをどのように統率していくか、といったことを常に考えていました。こうしたマネジメント能力は、監査の現場で鍛えられた部分が大きいと思います。

求められる英語力 活躍のためのスキルとは

—一次に、海外で、多国籍な環境でお仕事をするにあたって大変だったことをお聞かせください。

ニューヨークで働き始めてから数年間、何より大変だったことは、英語の壁です。

監査や会計の知識や経験がどれだけネイティブの方よりあったとしても、英語が流暢でないとアメリカで正當に評価してもらうことはできないと思います。例えばBDO USAに在籍していた時は部署に日本人が誰もいない状況でしたので、周りの人たちにとって英語をネイティブと同様に話すことは当たり前。ネイティブのように英語を話せない私に対して、表立って口には出さないけれど、「彼女は英語をきちんと話せていないけど仕事は大丈夫だろうか」と、見ているのではないかと感じてしまう場面は多々ありました。そうした経験を通して、ネイティブのアメリカ人と肩を並べて仕事をするためには、相手の主張を正しく理解し、自分の意見をしっかりと英語で言えるレベルの英語力が必須だと思い、それは私が英語の勉強を続ける大きなモチベーションになっていました。具体的には、職場でネイティブの人から届いたメールや同僚の会話に出てきた知らない単語や表現はその都度英英辞典で調べ、一つずつ覚えていきました。英英辞典を見ている姿は前述した理由から決してアメリカ人の同僚には見せられなかったもので、こっそりと英語を学ぶ日々でした。

—公認会計士として国際的に活躍するにあたって大事なことや大切にされていることがあればお聞かせください。

3つあると思います。ひとつはやはり、英語力。渡米当初、読むことはある程度できても、ネイティブの同僚たちの話が完全に聞き取れなかったり、自分が言いたいことがうまく表現できず、もどかしい思いをすることが多かったです。言葉はコミュニケーションの手段なので、受身ではなく自ら発信していかないと相手と分かりあうことはできませんし、英語がビジネスの場面で問題なく使えないと、英語以外の能力について疑問を持たれてしまうことも事実です。日本では、日本語が母国語でない海外の方に対して、相手に配慮してゆっくり日本語を話すことが多いと思いますが、アメリカは良い意味でも悪い意味でも気を遣わない文化なので、私がネイティブではないから

とって話す速度を遅くしてくれることはあまりありません。ネイティブと同様に接してくれるのは、差別をしていないという意味でありありがたいことですが、厳しさもあります。英語圏での仕事を考えた場合、実践的な英語力は不可欠だと思います。

2つ目は専門性です。私の場合、日本で会計監査の経験がニューヨークの監査法人での仕事で非常に役立ちました。グローバル展開をしているBig4のような監査法人の場合、全世界で統一されたツールを使用していますので、監査のやり方や考え方は世界共通の部分が多いです。そのため、国が変わってもこの部分で困ることはありませんでした。このように、日本で会計監査の知識をしっかりと学ぶことができて良かったと、渡米してから感じる場面は多かったです。

最後の3つ目は、自分にしかできないことを強みにする、ということです。たとえ言葉のハンディがあったとしても、他の人に見えない強みがあるユニークな人材であれば、アメリカでは面白い人材として認めもらうことができます。私にとってそれは、会計監査とビジネスの場面で使える日本語の掛け合わせでした。英語が流暢な日本人であっても、日本で社会人経験がない等の理由で、クライアントや日本の本社チームとやり取りすることに抵抗がある同僚たちがいる中、日本の監査現場での就労経験が私の大きな強みであると感じたのは、アメリカで働き始めてからのことです。日本では当たり前だったことが、場所が変わると強みになるのはとても面白いと思いました。このように掛け算的思考で自分の強みを組み合わせて、自分にしかできないキャリアを築いていけば、語学の面で多少のハンディがあってもカバーできると思います。

話は少し変わりますが、日本の公認会計士試験はかなりレベルが高い、ということを実感しています。アメリカでは、USCPAの試験に受かっていない状態で監査法人に入所し、働きながら最終的に全科目を合格するというスタイルが一般的です。試験内容は日本の方がはる



かに難易度が高く、日本の会計士試験に合格した時には、かなりの基礎学力が身についていると思います。そういった意味でも、日本の公認会計士の資格は海外でそのスキルを活かせるし、将来の視野も無限に広がっていくのではないのでしょうか。

海外で働くためのポイント 日本人であることを生かす

一須能さんが考える海外で働くことに向く人はどんな人でしょうか。

何と言っても柔軟性のある人だと思います。海外での暮らしは、日本のように便利なことばかりではないですし、宗教上の制限があって食べるものが限られている同僚と一緒に仕事をする場合は、私自身が食べるものにも制約が出てきます。そうした状況に柔軟に対応し、様々な宗教や価値観を持つ人々を尊重して仕事をしたいとチームとして機能しません。また、アメリカはワークライフバランスをととても重視しているので、その対応も必要です。例えば金曜日であれば5時を過ぎたらオフィスは空で、6時過ぎまでオフィスに残っていると「どうしたの？大丈夫？」と、

違う部署の人にも言われてしまうくらいです。繁忙期でも自分の人生を最優先していて、その過ごし方も日本とアメリカでは大きく異なるように感じます。チームを統括する立場になった場合、こうした違いを受け入れ、自ら率先してチームメンバーへの配慮を行うことも大切です。ニューヨークのように人種のるつぼと呼ばれる都市では、育った環境や考え方、生き方が違う人たちばかりですので、どれが良いとか悪いとかではなく、その状況をそのまま受け入れるという柔軟性が必要だと思います。

一今後のキャリアビジョンについて教えてください。これからの夢や目標などがあれば併せて教えてください。

アメリカに移ってすぐに、日本人はアメリカのことをよく知っているのに、日本のことをほとんど知らないアメリカ人が多いというギャップに衝撃を受けました。日本には伝統工芸品など世界へ誇るものがたくさんありますが、海外での地知名度はそれほど高くありません。これからは、もっと日本の良さを海外の人に知ってもらうための活動をしたいです。

また、ニューヨークに憧れて、ニューヨークでビジネスをしてみたい人もたくさんいらっしゃると思いますが、日米の商環境の

違いや言葉の壁などがあって、なかなか拠点を移すまでに至っていないと思います。たとえば会計の世界を見ても、日本人は勤勉で、優秀な会計士が多いのに、海外に出ている方が少ないのはもったいないです。思い切って一步日本の外へ踏み出してみると、日本ではできないような体験ができ、人生の幅が広がることは間違いありません。そこで、無職からスタートしてグリーンカードを取得した私の渡米体験が、海外で働くことを夢見ている方々の何かの参考になれば、という思いで、2020年の秋に「ニューヨークで学んだ人生の拓き方」というキンドルの本を出版しました。帰国子女でなく、会社派遣などの形でなくても、やる気と夢を持っていれば海外で働くことができることを、公認会計士の資格を生かしながらここまでやってきた自分の体験を通じて、もっと多くの人に伝えることができれば、と考えました。その本がきっかけで、今年の春には愛知県立大学の学生さん80人を前に、将来のキャリアを考える授業で、私自身の渡米体験についてお話する機会に恵まれました。今後も私の経験をシェアすることで、海外での生活に憧れている人たちの夢や希望を後押しすることができれば、と思っています。

—最後に、公認会計士を目指す学生たちにメッセージをお願いします。

公認会計士は様々な可能性を秘めていると思います。日本では公認会計士イコール監査法人に入所、または監査法人を経て一般企業の経理へ、というキャリアパスが主流になっていると思いますが、アメリカの場合、「会計はすべての基本」と考えられていて、経営者自身や主要部署のトップが会計士だったり、会計を使っているようなキャリアパスが広がっているように感じています。どのような分野で働く場合でも、利益体質の会社にするためには、財務会計や管理会計の考え方が基礎となってきますので、公認会計士としての知識や経験は重宝すると思います。受験生の方には、勉強で学んだことが今後にも繋がり、公認会計士の資格を持つことで将来の可

能性は無限に広がっていくと信じて、頑張ってくださいと思います。

このインタビューは2021年8月、リモートで取材をさせていただきました。まとめました。



〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1
TEL:03-3515-1120(代表)
03-3515-1130(国際渉外グループ)
<https://jicpa.or.jp/>